

海ぼたる

小川未明

青空文庫

ある日、兄弟は、村のはずれを流れている川にいつて、たくさんほたるを捕らえてきました。晩になって、かごに霧を吹いてやると、それはそれはよく光つたのであります。いずれも小さな、黒い体をして、二つの赤い点が頭についていました。

「兄さん、よく光るね。」と、弟が、かごをのぞきながらいいますと、

「ああ、これがいちばんよく光るよ。」と、兄はかごの中で動いている、よく光るほたるを指さしながらいきました。

「兄さん、牛ぼたるなんだろう？」

「牛ぼたるかしらん。」

二人は、そういつて、目をみはっていました。牛ぼたるというのは、一種の大きなほたるでありました。それは、空に輝く、大きな青光りのする星を連想させるのであります。

その翌日でありました。

「晩になったら、また、川へいつて、牛ぼたるを捕つてこようね。」と、兄弟はいいました。

そのとき、二人の目には、水の清らかな、草の葉先がぬれて光る、しんとした、涼しい風の吹く川面の景色がありありとうかんだのであります。

ちようど昼ごろでありました。弟が、外から、だれか友だちに、「海ほたる」だといって、一匹の大きなほたるをもらつてきました。

「兄さん、海ほたるというのを知っている？」と、弟は兄にたずねました。

「知らない。」

兄は、かつて、そんな名のほたるを見たことがありません。また、聞いたこともありません。

さつそく、兄は、弟のそばにいつて、紙袋に包んだ海ほたるをのぞいてみました。それは、普通のほたるよりも大きさが二倍もあつて、頭には、二つの赤い点がついていましたが、色は、ややうすかつたのであります。

「大きなほたるだね。」と、兄はいいました。あまり大きいので、気味の悪いような感じもされたのであります。

二人は、晩には、どんなによく光るだろうと思つて、海ほたるをかごの中に入れてやりました。

「海^{うみ}ぼたるをもらつたよ。」と、兄^{きょうだい}弟^{だい}は、外^{そと}に出^でて、友^{とも}だちに向^むかつて話^{はな}しましたけれど、海^{うみ}ぼたるを知^しっているものがありませんでした。

まれに、その名^なだけを知^しつていても、見^みたといつたものはありませんでした。もちろん、その海^{うみ}ぼたるについて、つぎのような話^{はなし}のあることを知^しるものは、ほとんどなかったのであります。

昔^{むかし}、あるところに、美^{うつく}しい、おとなしい娘^{むすめ}がありました。父^{ちち}や、母^{はは}は、どんなにその娘^{むすめ}をかわいがつたかしれませんが、やがて娘^{むすめ}は、年^{とし}ごろになつてお嫁^{よめ}にゆかなければならなくなりました。

両^{りょうしん}親^{しん}は、どこか、いいところへやりたいものだと思^{おも}つていました。それですから、方^{ほう}々^{ぼう}からもらい手^てはありましたが、なかなか承^{しょう}知^ちをいたしませんでした。

どこか、金^{かね}持ち^もちで、なに不^ふ自由^{じゆう}なく暮^くらされて、娘^{むすめ}をかわいがつてくれるような人^{ひと}のところへやりたいものだと考^{かん}えていました。

すると、あるとき、旅^{たび}からわざわざ使^{つか}いにやつてきたものだといつて、男^{おとこ}が、たずねてきました。そして、どうか、娘^{むすめ}さんを、私^{わたし}どもの大^{だい}尽^{じん}の息^{むすこ}子^このお嫁^{よめ}にもらいたいといつたのです。

両親は、けつして、相手を疑いませんでした。先方が、金持ちで、なに不自由なく、そして、娘をかわいがってさえくれればよいと思つていましたので、先方がそんなにいいところであるなら、娘もしあわせだからというので、ついやる気になりました。

ただ、娘だけは、両親から、ひとり遠く離れてゆくのを悲しみました。

「遠いといつて、あちらの山一つ越した先です。いっだつてこられないことはありません。」と、旅からきた男は、あちらの山を指さしていいました。

その山は、雲のように、淡く東の空にかかつて見られました。

「そんなに、泣かなくてもいい、三年たつたら私たちは、おまえのところにたずねてゆくから。」と、両親はいいました。

娘は、涙にぬれた目を上げて、東の方の山をながめていましたが、

「どうか、毎日、晩方になりましたら、私がああ山のあちらで、やはり、こちらを向いてお父さんや、お母さんのことを、恋しがつておもうと思つてください。」といいました。これを聞いて、父親も、母親も、目をぬらしたのであります。

「なんで、おまえのことを片時なりとも忘れるものではない。」と答えました。

娘は、とうとう旅の人につれられて、あちらの郷へお嫁にゆくことになったのでありま

す。

娘がいつてから、年をとつた父親や、母親は、毎日、東の山を見て娘のことを思つていました。けれど、娘からは、なんのたよりもなかつたのです。

娘は、まったく、旅の人にだまされたのでありました。なるほど、いつてみると、その家は、村の大尽であります。また、舅も、姑も、かわいがつてはくれましたけれど、賢という人は、すこし低能な生まれつきであることがわかりました。

彼女は、この愚かな賢が、たとえ自分を慕い、愛してくれましたにかかわらず、どうしても自分は愛することができなかつたのです。

娘は、西にそびえる高い山を仰ぎました。そして、明け暮れ、なつかしい故郷が慕われたのです。三年たてば、恋しい母や父が、やってくるといったけれど、彼女はどうしても、その日まで待つことはできませんでした。

「どうかして、生まれた家へ帰りたいもんだ。」と、彼女は思いました。

しかし、道は、遠く、ひとり歩いたのでは、方角すらも、よくわからないのであります。彼女はただわずかに、川に添うて歩いてきたことを思い出しました。どうかして、川ばたに出て、それについてゆこう。その後は、野にねたり、里に憩うたりして、路を聞

きながらいつたら、いつか故郷に帰れないこともあるまいと思いました。

ある日、娘は、聾や、家の人たちに、気づかれぬように、ひそかに居間から抜け出たのであります。

川の流れているところまで、やつと落ちのびました。それから、その川について、だんだんと上つてゆきました。女の足で、道は、はかどりませんでした。草を分け、木の下をくぐったりして歩きました。いまにも、彼女は、追つ手のものがきはしないかと、心は急ぎました。どうかして、はやく、川をあちらへ渡つて越したいものだと思いました。けれど、どこまでいつても、一つの橋もかかつていなかったのです。

川上には、どこかで大雨が降つたとみえて、水かさが増していました。やつと、日暮れ前に、一つの丸木橋を見いだしましたので、彼女は、喜んでその橋を渡りますと、木が朽ちていたとみえて、橋が真ん中からぼつきり二つに折れて、娘は水の中におぼれてしまいました。

「死んでも、魂だけは、故郷に帰りたい。」と、死のまぎわまで、彼女は思っていました。

やがて、娘の姿は、水の面に見られなくなりました。すると、その夜から、この川に、

ほたるが出て、水の流れに姿を映しながら飛んだのであります。

愚かな聾は、美しい嫁をもらって、どんなに喜んでいたかしれません。そして、自分ほ
 できるだけ、やさしく彼女にしたつもりでいました。それが、ふいに姿を隠してしまっ
 たので、また、いかばかり、悲しみ、歎いたでありましょう。ついに聾は、家の人たちが
 心配をして、見張りをしていたにもかかわらず、いつのまにか、家から飛び出して、同
 じ川に身を投げて死んでしまいました。

この水ぶくれのした死骸は、川の上に浮いて、ふわりふわりと流れて、みんなの知らぬ
 まに、海に入ってしまったのであります。不思議なことに、この死骸も、またほたるにな
 ったのです。

これが、海ほたるでありました。

二人の兄弟は、海ほたるについて、こんな物語があることを知りませんでした。
 ただ、大きいから、かごの中に入れて、よく光るだろうと思っていました。

晩になると、海ほたるはよく光りました。川のほたるも負けずによく光りました。
 「みんな、よく光るね。」と、兄と弟は、喜んでいいました。

あくる日の晩は、あまり両方とも、前夜のようによく光りませんでした。自然を

家として、川の上や、空を飛んでいるものを、狭いかごの中にいれたせいでもありませんよ。ほたるは、だんだん弱って、日ごとに、小さな川のほたるから、一匹、二匹と死んでゆきました。そして、最後に海ぼたるだけがごの中に残りました。しかし、その光も、だんだん衰えていつて、なんとなくひとりいるのがさびしそうです。

ある朝、二人は、この大きなほたるも死んでいるのを見いだしました。そのときすでに、じめじめした梅雨が過ぎて、空は、まぶしく輝いていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「赤い鳥」

1923（大正12）年8月

※表題は底本では、「海《うみ》ぼたる」となっています。

※初出時の表題は「海螢」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海ぼたる

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>